

靴の寄付から考えたこと

久留米大学附設中学校 1年 田村 悠花

私は、小学五年生の時、学校の図書館でマラソンランナーの高橋尚子さんについて書かれた本に出会った。その本をきっかけに、高橋尚子さんがアフリカに靴を寄付する活動をしていることを知った。

その活動について詳しく調べてみると、目的はスナノミ症という病気を防ぐことだという。スナノミ症とは、スナノミという砂の中にいるノミが皮膚に寄生して、強い痛みやかゆみが現れる病気で、アフリカや中南米などに多く見られる。スナノミは皮膚内に卵を産み付け、血液などを栄養として増えていく。悪化すると足の切断などにもつながり、全身が弱って命が脅かされることもある。スナノミは高く跳ぶことができないので、裸足で歩いている人の足に寄生することが多いという。靴をはいていれば感染を防げる病気なのだが、裸足で過ごす人が多い地域ではスナノミ症にかかる人も多いそうだ。

私は、少しでもスナノミ症にかかる人を減らす力になりたいと思って、早速、サイズが合わなくなった私の運動靴を寄付することにした。靴をきれいに洗いながら、私の靴をはいてアフリカの大地を元気にかけ回る子たちを想像すると、私もうれしくなった。

だが、寄付した後で、ふとある思いがうかんだ。私が送った靴をもらった子も、成長して靴が入らなくなるだろう。その時、その子はどうするのだろうか。また足に合った靴をもらえるのだろうか。ちょうどいいタイミングで、ちょうどいいサイズの靴が、その子にめぐってくるだろうか。もしかしたら、次の靴を手に入れるまで裸足で過ごし、その間にスナノミ症にかかってしまうのではないかと自分のことのように不安になった。

全ての人が、寄付に頼らなくても自分で靴を手に入れることができれば、スナノミ症はもっと減らせると思う。そのためには、例えば、靴をつくる技術を伝えれば、寄付された靴を修理して長持ちさせることで、寄付に頼る回数を減らすことができる。さらに、みんなが経済的に豊かになれば、いつでも自分に合った靴が買えるようになり、スナノミ症を撲滅することができるのではないだろうか。

いまの自分には、靴を寄付することや、このような病気があることを周りの人に伝えることしかできない。しかし、いつかスナノミ症にかかって苦しむ人がいなくなるように世界を変えていきたいと私は思っている。私は日本に暮らしていて裸足で外を歩くことはないが、世界には靴を手に入れることができないせいで、病気にかかり苦しんでいる人もいる。私は将来、このような格差をなくすために、国と国との架け橋になるような仕事がしたいと思っている。